
PARTIAL TALES ~START LINE~

伊東 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PARTIAL TALES ~START LINE~

【Zコード】

Z5792D

【作者名】

伊東光

【あらすじ】

人生をハッピーハンドにしようと、決心した女子高生。彼女と彼女を語る八人の、切なくてそれなのに元気が出てくるお話。

ドアを開けると、笑っているお父さんとお母さんが立っている。深夜、ふと眼が覚め、ぼんやりとしたアタマでさつきの夢について考える。ここ五年間、薔の見る夢は毎日同じだった。そして、また考える。なぜ、あの人は狂ってしまったのだろうか。なぜ、家族が壊れてしまったんだろうか。一つ目の理由は分かつてゐる。一つ目も同じだ。でも、やっぱり、やっぱり認めたくない。怖いから、悲しいから、つらいから、ドアの向こうを見れない。

お父さん、帰ってきて。あの人をどこかにやつて。
お母さん、戻ってきて。あの人と二人つきりはイヤ。
どうしよう、私。どうしようか、私。

映画の最後には「THE END」の文字が浮かぶ。スタッフホールのあとのお約束だ。ハッピーエンドでもバッドエンドでもこれは変わらない。間違いない、映画好きの私が言つんだから。でも、このままじゃ絶対に私の人生はバットエンドで終わっちゃう。「THE END」の文字を不幸の文字にはしたくない。だから、だからもうひ、これしかない。

朝、薔は心を決めていた。まず、城先輩に会いに行こう。そして話を聞いてもらおう。進まなきや、進まなきや。映画だって、何かしらの新展開が無くちゃ面白みにかけるんだし。きっと、私も進むべきだ。対決しなくちゃ、あの人と。そのための準備をするべきなんだ、そう思うとなんだか身体が軽くなつた気がした。

T・記憶の中へ

「俺が卒業する一週間前と言つと、ちょうど五年前か」

一月も終わりを迎えた三月が田の前に迫り始めた日の深夜、俺は水野薔に会った。残業帰りで終電を逃してしまい、タクシーを捕まえようとするでも無く、ただなんとなく、無心に近い状態でぶらぶらして居たときだつた。

「城先輩ですか」

最初は空耳かと思った。でも違つた。声の主が目の前に立つていたのだから。

「おまえ、薔だろ。ぜんぜん変わらないなあ。久しぶり」

「お久しぶりです、先輩。良かつたら、これから飲みませんか」

そう言つて、薔は俺を深夜三時すぎまで営業している居酒屋へと連れ行つた。

「最後に会つたのが五年も前なのに、おまえの見かけが変わってないのはどういうわけだ」

中ジョックキに一口三口、口をつけたのどを潤してから、尋ねる。

「五年や、そこいらで人は変わらない。そういうのは城先輩でしたよ」

そういえば、そうだつたなと記憶の紐を解いていく。

高校を卒業する一週間前、すでに俺は大学への進学が決まっていて暇を持て余していた。このときに、大学を中退することが分かつていたら、俺は焦つていただろうか。

確かに、その日の朝は日課どおり、近所のファストフード店でコーヒーを飲んでいたんだろうと思う。ガキの癖に、生意氣にもブラックで。日曜だったからいつも異常にのんびりしていたはずだ。そう、ここだ。ここで薔が現れた。

「先輩、発見」

そう言つと、断りもせず、悪びれもせずに向かい合つようになつた。彼女は座つた。記憶ではそうだ。ただ記憶が、でつち上げられている可能性も無きにしも非ず、といつたところだ。そのときの薔薇が、期待と興奮と焦りとをじりぢりや混ぜにしたような顔をしていたのは間違いない。と、思う。

「薔薇、何でいんの」「あぐびをかみ殺しながら尋ねた、はず。

「先輩つ、先輩。聞いてくださいよ」

弱小、常敗剣道部の部員同士ではあつたが、恋人同士と言つわけでは無いのに水野薔薇はいつも、子犬のようになれなれしく無邪気だつた。いや、俺に対してだけでなく、誰にでもそうだつた。そして、周囲はそんな彼女に冷たかつた。そしてそして、たぶんそのことに気づいてさえいなかつた自分が唯一の彼女の柱だつた、という可能性もある。

今思えば、そんな中彼女が耐えてきた苦痛は想像すると、悲しい。すじく悲しい。

薔薇が、「計画」の話を終えるまで俺は黙つて聞いていた。

「つとこつことです。どう思いますか、城先輩」

「お前の家五年も前から、そんなことになつてたのか」

数秒間、声を失つた。のどが渴ききつて心が砂漠になつっていく。手に持つっていた紙コップを、口にもつて行こうとするが動かない。その間、薔薇の顔は何かの期待を抱いているかのように輝き続けていた。やつと言葉が出る。

「親父さんを、恨んでいるのか」

「恨んでなんかいませんよ」と即答され、俺は戸惑つた。

「でも、怖いんですね、毎晩。だからもう、いつするしかないと思つんです」

「捕まつてもいいのか」そう尋ねても、彼女の顔は歪みすらしなかつた。

「城先輩、この計画が成功したら、きっとハッピーハンドを迎えるれる気がするんですよ」

もう何を言つても、彼女には無駄な気がした。でも言つてみた。言うしかないじゃないか、と頭の中の何かが叫んだ。

「時が解決するのを待つて見ろよ。五年ぐらいじゃ人は変わらないんだ。十年先、二十年先まで待つてみろよ」と確かにこう言った。五年も、虐待に耐えてきたアイツにこの言葉は無責任すぎた。俺はやっぱり柱じやないな、思い上がりだな、と気づきそして、後悔する。

最後に何と言つて、薔が店を出て行つたのかは覚えていない。記憶なんてそんなものだ。

お客様、着きましたよ、と起されたのはタクシーの中で、マンションの目の前だつた。ただ、居酒屋の中ではなく、目の前に水野薔がないことだけが気になる。

彼女が、以前よりも遙かに幸せそうに見えたのは気のせいだつたのだろうか。

人は変わるが、記憶の精度は相変わらず変わらないものなのだと思つた。そんな夜だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5792d/>

PARTIAL TALES ~START LINE~

2010年10月14日19時21分発行